

## 子どもにおける遊び種類による遊び能力の差についての検討

姜 信善・滝川 祐子\*

### A Study on Differences of Playing Ability by Forms of Playing in Elementary School

Sinsun KANG and Yuko TAKIKAWA

キーワード：子ども，遊び能力，遊び種類，遊び相手，遊び場所

Keywords : Children, Playing Ability, Forms of playing, Playmate, Places to play

#### 問題及び目的

遊びは子どもの発達に重要な影響を及ぼす。長谷川(2005)は子どもの遊びに関して次のように述べている。子どもの遊びとは、成人の遊びとは全く性質の違うものであり、仕事からの解放感を求めて遊ぶのではなく、子どもは遊ぶことを目的として遊ぶのであり、活動すること自体を目的として活動すると述べている。そうすることによって、満足感が得られ、またその満足感を求めて活動し、その反復を通して子どもの人格が形成されていくと考えられている。子どもは遊びを通して、人間として成長、発達し、文化創造の力を養っていく。そして、遊びこそ創造的思考を発達させる母胎であり、遊びの本質である自発的活動は、幼児期だけでなく人間一生の学習にとっても必要であり、その意味で、遊びは学習であり、学習は遊びでもありと考えられる。子どもにとって遊びは、成長していく上で欠かすことのできないものであり、子どもの生活のほとんどは遊びから成り立っていると述べられている(長谷川, 2005)。

さらに、遊びが子どもに及ぼす影響についての研究からは、次のようなことが示されている。

まず、遊具による遊びの種類を分類し、その遊びの子どもへの影響について、長谷川(2005)は、自然の中で遊ぶことによって、自分で考えて工夫して遊ぶことから創造力が養われると述べている。積み木やブロックなどの玩具のようなものを使った遊びでは、その玩具を自分で作ったり、親などに作ってもらったりすることから、玩具そのもののありがたさや親への感謝の気持ちを覚えたと指摘し、何より、自分で努力してものを作るという自立性が生まれると述べられている。さらに、子どもは遊びを通して物や物同士の関係だけではなく、人間や人間関係についても学ぶという(KathyHirsh-Pasek& Roberta MichnickGolinkoff & DianeEyer, 2006)。ま

\*富山大学教育学部 学校心理学専攻 平成18年度卒業

た、物を使った遊びは、自分でちょっとした実験をし、物に何ができるかできないかを発見する機会が得られ、知能の発達にとって大切であることが明らかとなっている。学校現場において遊びを含めた体験活動を充実させることで、さらに各子どもの能力が高まり、ひいては仲間とのよりよい集団生活ができるものと考えられる。遊びなどの体験活動は、学校のみに限らず、家庭や地域社会の中でも保障する努力が望まれると述べている。

次に、遊び場所により、遊びを分類し、その子どもへの影響に関する研究では、遊びを大きく外遊びと内遊び(室内遊び)とに分類し、外遊びの重要性が示されている(深谷, 1990)。遊びの中で子どもは本来能動的であり、直接体験の中で育っていくものである。好奇心を持ち、発見や創造の楽しみに取り組んで遊ぶのが子どもの遊びの特徴であり、そのような特徴を持つ遊びが戸外での遊びであるとし、外遊びの重要性が唱えられている。

さらに、仲間遊びと1人遊びが子どもに及ぼす影響を比較した研究では(村瀬・落合・矢野, 2005)、小学生を対象に子どもの遊びの状況や生活などを調査した結果、1人で遊ぶことは「室内遊び」を促進することになり、誰かと一緒に遊ぶこと及び自分の家以外で遊ぶことは多くの遊びに親しむことへの促進要因となっていると述べられている。

そして、石田(1998)は、子どもの社会性は遊びの活動を通して身につくと指摘し、特に、集団遊びを通して、他人との好ましい関係作りが重要となると述べている。子どもは楽しい遊びを通して、様々な経験や学習ができ、心身の発達を促進させる。また、子どもは、遊んでいる仲間集団の中で、協力したり対立したりすることによって、子どもの「自己中心性」が、社会的・情緒的にも知的にも克服され、「脱中心化」していくと考えられている。それによって、子どもの認知の枠組みの組みかえが行われ、子どもは遊びを通じて知性、社会性、道徳性を発達

させるという。子どもが、子どもから人間へと徐々に成長していく上で、「脱中心化」したり、規範意識を獲得したり、道徳性を身につけたりするということは、遊びでしか得られないものなのである。子どもが、お互いのかかわり合いの中で成長していくことこそが、遊びの本来の役割であるという（眞下, 2006）。

このような子どもの発達における遊びの重要性から遊び能力という観点での研究がある。まず、遊び能力とは、遊び活動を行うための個人の総合的な能力をさすものである（祐宗, 1994）。この遊び能力は、森・植田・福井（1982）では、子どもの母親と保育者による回答により、大きく3つの能力の計12の評価項目で構成されている。1つめは、子どもがほかの子とお互いにやり取りする際の能力である相互作用能力（能動性・指導力・応答力・協力度・喜悦度）、2つめは、集団遊びの中でうまく行動できる能力である組織的行動能力（役割遂行度・規則遵守度・理解力）、3つめは、遊びそのものやルール及び遊びに関わる道具・道具などを作り出す能力である創造的能力（工夫力・技巧度・発想力・関心度）である。森・植田・福井・西田は、この遊び能力と学校生活における対人関係能力（学級集団内における地位など）との関連を明らかにしている（1984）。また、学校生活態度と遊び能力との関係は高い正の相関がみられ、遊び能力は一般的な生活態度の形成にも深く関与していることが示されている（森・植田・福井・西田, 1985）。具体的には学校生活態度尺度15項目のうち、次の5つの項目で遊び能力との間に相関関係が見られた。1 “しっかりした自分の考えを持ち、意見を発表できる”, 2 “自分で計画をたて、進んで活動することができる”, 3 “自分の言動に責任を持ち、仕事を果たすことができる”, 4 “生活をより良くするために、新しい考えや方法を出すことができる”, 5 “誰とでも仲良くし、力をかすことができる”であった。これらは、遊び能力として培われたものが発展したものと考えられた。すなわち、学校生活態度尺度項目の1及び2は遊び能力の評価カテゴリーのうち、主に「理解力」や「能動性」と関わり、3は「役割遂行度」と、4は「創造的能力」、5は「協力度」と関連が深いと述べている。このように、仲間関係や学校生活を円滑にするために子どもの遊び能力は重要な役割を果たしていることが示されている。

姜・滝川（2007）では、子どもにおける遊び能力の自立性への影響が明らかにされている。具体的には、遊び能力を基本的遊び能力と対人交渉能力の2つの側面から捉え、尺度を作成し、検討を行なった。

まず、基本的遊び能力は、「気遣い・公平」、「創造性」、「自己表出」の3因子構造であることが示された。遊びを楽しくし、友達と仲良く遊ぶためには、周りのことを考え、行動し、自分の考えや意図を相手に伝え、遊びについてのアイデアや遊びへの豊かな創造性が大切であるとみなされた。次に、仲間入り場面での対人交渉能力

は、「思いやり受諾」、「条件付受諾・拒否」、「説明をともなった拒否」の3因子構造であった。対人交渉能力、つまり、仲間に入れてほしいと言われたときの交渉の仕方については、相手の立場から考え、公平な立場になって示すこと、相手や遊びの状況を考えて、受け入れるか否かについて自分自身の明確な判断基準をもつこと、相手の仲間入りを断る場合においても自分の都合や気持ちに偏らず、相手の立場を考え、その理由などをきちんと伝えることが重要なポイントとなってくることが示された。

それでは、遊び能力はどのような環境要因によって育まれるのだろうか。祐宗（1994）によると、遊び能力が育まれるには、時間・空間・遊具・対人関係の4条件が大切であるという。具体的には、1つ目に、時間的、空間的制約から自由な遊び環境である。子どもたちが自由に活動できる「物理的な空間の確保」、「遊び時間の保障」が遊びを進展させる。2つ目に、不確実性の要素を含んでいる可変的な遊び環境である。これには、環境の目新しさや複雑さ、多様性、可変性が含まれている。これらは子どもの好奇心や創造性を刺激し、遊びへの意欲をかき立てるとともに、遊び環境への積極的な働きかけを促進させるものといえる。3つ目に、低構造的な遊び環境である。遊びの材料や遊具といった遊びの対象物の構造的な環境が大切である。例えば、粘土や砂、水などの構造的な環境が低いものはいろいろな遊びに使用できる自由さ・曖昧さと子どもたちの働きかけに対する応答性を持っている。最後に、許容的・支持的集団風土を持った遊び環境、つまり、人的環境である。親や保育者、仲間が受容し、共感し、援助し、見守ってくれる環境は何より子どもの自立性を育み自由な発想や発言を可能にする。温かい対人関係の中で、子どもはのびのびと自己を表現し、遊びの世界を広げていく。そして、それがその子どもの対人関係のベースとなって蓄えられていくのである。このような遊び環境の下で遊び能力が生まれ、子どもの発達に様々な影響を及ぼしていくと考えられる。

上述の祐宗（1994）で指摘されているような遊び能力が養われる環境要因を考慮に入れ、本研究では、次のように遊びを分類し、遊び能力との関連について、検討を行なうこととする。すなわち、まず、時間的、空間的制約から自由な遊びとしては、子どもが思いっきり遊ぶことのできる外での遊びが考えられ、外遊びか内遊びかという遊び場所による遊び能力の差を検討する。次に、不確実性の要素や多様性があり、構造的な低い遊びについては、子どもにとって自由に行動できる遊びであり、決まりごとや遊具を必要としないような遊びと捉えられた。よって、ルールや遊具を取り入れているか否かといったことによる遊び能力の差を明らかにする。最後に、遊びの人的環境としては、友達などに関わり合い、共に遊ぶことのできる仲間との遊びがよりよいと考えられ、1人遊びか仲間遊びかに

よる遊び能力の差について検討する。

## 1. 予備調査（研究Ⅰ）

### 目的

本研究では、遊び環境要因、すなわち、遊び相手の有無、遊び場所、遊具の有無を考慮に入れた上で、遊びを分類し、それらの遊び能力への影響を検討する。そこで、予備調査では、日ごろの子どもの具体的な遊びについて自由記述によって調べることとする。

### 方法

**対象者：**T県の小学5,6年生220名（男子：5年生50名・6年生54名計104名；女子：5年生48名・6年生68名計116名）

**調査時期：**2006年7月中旬

**調査内容：**子どもが日頃、どのような遊びをしているのか、遊びの具体的な内容を収集するため、「1人有的时候」「友達有的时候」「外で遊ぶとき」の3場面を設け、さらに、その3場面それぞれについて「学校にいるとき」及び「帰宅後や学校が休みのとき」どんな遊びをしたのかを自由記述により回答が求められた。これは、「どのような遊びをするのか」と言う聞き方では、似かよった回答が予想される。そこで、実際の調査に関してはより多くの子どもの遊びの内容の収集のため、普段の遊びだけでなく、子どものやりたい遊びを自由に好きなだけ書くことができ、さらに、複数の回答が予想されることから、「どのような遊びをしたいのか」について回答が求められた。

### 結果及びまとめ

得られた回答を分析した結果、遊びは次のように分類することができた。

まず、1人遊びか、仲間遊びかの違いにより分類され、さらに、仲間遊びの場合、道具や遊具などの「物」を使うかどうか、ルールがあるかどうか、により分けられた。最終的には5つのカテゴリーに分類することができたが、その詳細については以下の通りである。ここで、遊具やルールを取り入れた場合においても、1人だけで遊ぶものはすべて1人遊びと分類された。

#### ① 1人遊び

1人でする遊びとして、具体的に読書やTV・DVDを見る、TVゲーム、インターネットなどがあつた。

#### ② 仲間遊び

遊具やルールを必要としない、仲間だけでできる遊びであり、具体的におしゃべりやマラソン、外出などが含まれた。

#### ③ 仲間・ルール遊び

仲間と一緒にルールを加えた遊びであり、具体的に鬼ごっこ、かくれんぼなどがあつた。

#### ④ 仲間・遊具遊び

仲間と遊具を介してできる遊びであり、具体的にキャッチボールや鉄棒、自転車、なわとびなどが含まれた。

#### ⑤ 仲間・ルール・遊具遊び

仲間とルール及び遊具を介してできる遊びが含まれ、具体的にボール遊び（サッカー、野球、ドッジボール、バドミントンなど）、TVゲーム、トランプなどに分類された。

なお、「1人遊び」、「仲間遊び」、「仲間・遊具遊び」、「仲間・ルール遊び」、「仲間・ルール・遊具遊び」の5つを遊びタイプⅠと称する。

次に、上述の遊びタイプⅠにおいて、「仲間遊び」、「仲間・ルール遊び」のように、遊具などを取り入れることなく、仲間と遊ぶ場合と「仲間・遊具遊び」、「仲間・ルール・遊具遊び」のように、仲間やルールに、さらに遊具を取り入れた遊びの場合とで、遊びの構構性が異なってくると考えられる。先述の遊びの対象物の構構性が低い環境が大切であるという指摘から、低構構性の遊びの場合、子どもが自由に発想したり、行動したりでき、自ら楽しく遊ぼうと考える力が身につけやすく、それに対して構構性の高い遊びは、テーマや内容が限られるため、遊びに関する多様な案を出したり、考えたりする機会が少ないことが推察される。つまり、「仲間遊び」のように低構構性の遊びと、それに遊具やルールが加わった「仲間・ルール・遊具遊び」のような構構性のより高い遊びとでは、遊び能力において何らかの異なる影響を及ぼすのではないかと考えられ、以下のように分類を行った。

遊びタイプⅠにおいて、遊びに遊具や物を取り入れたか否かによって、再分類を行った。つまり、遊びタイプⅠの「1人遊び」を除いた4つの中、「仲間遊び」及び「仲間・ルール遊び」を『仲間遊び』とし、「仲間・遊具遊び」及び「仲間・ルール・遊具遊び」を『仲間・遊具遊び』と再分類した。この再分類した2つをあわせて、遊びタイプⅡと称する。

## 2. 遊び種類による遊び能力の差（研究Ⅱ）

### 目的

遊びの種類によって遊び能力にどのような差を示すのであろうか。ここでは、先述したとおり祐宗（1994）が指摘した遊び能力に関する環境要因を考慮に入れ、遊び種類を遊び相手の有無・程度、遊び場所、遊具・ルールの有無という観点から分類し、遊び能力との関連について、詳しく検討していくことを目的とする。

### 方法

**対象者：**T県の7校小学5,6年生計719名（男子：5年生180名・6年生179名計359名；女子：5年生188名・6年生172名計360名）

**調査時期：**2006年12月上旬

### 調査内容

(1) 遊び能力に関する測定：姜・滝川（2007）で作成された基本的遊び能力及び対人交渉能力尺度を用いる（Table1-1, 1-2参照）。

Table1-1 基本的遊び能力尺度項目

No	項目内容
<b>第1因子 気遣い・公平</b>	
5	ルールをしっかり守って公平に遊ぶ。
11	自分の都合に合わせず、友達に何をやりたいか聞く。
27	相手がしてほしいことをなるべくやってあげる。
20	遊ぶとき、みんなが遊びに参加できるようにする。
25	遊ぶとき、相手のやりたいことと自分のやりたいことを交互にする。
10	遊ぶとき、ずるや卑怯なことはしない。
24	遊べる時間や場所を考えて遊びを決める。
1	危険がないように、遊具や物を安全にを使って遊ぶ。
<b>第2因子 創造性</b>	
7	自分で工夫して作ったほかにはないような新しい遊びをする。
17	遊んでいるとき、自分たちが楽しめるようにルールを作り変える。
22	学校や家にあるいろいろなものを遊びに使えないか、考えたり、試したりする。
2	遊びに楽しいルールを付け加える。
21	友達を笑わせたり、自分から遊びを盛り上げる。
<b>第3因子 自己表出</b>	
3	何をして遊ぶか話し合うとき、自分の意見を言う。
8	遊ぶとき、自分が知っている遊びを提案する。
18	遊ぶとき、言いたいことがあったら、心に隠しておかず、なるべく言うようにする。

Table1-2 対人交渉能力尺度項目

No	項目内容
<b>第1因子 思いやり受諾</b>	
13	入れなかったら、自分も相手も嫌な気持ちになるから入れる。
7	仲間はずれにしたらいけないので入れる。
1	かわいそうだから入れてあげる。
10	自分が入れなかったら、嫌だから入れる。
4	差別をしないで入れてあげる。
<b>第2因子 条件付受諾・拒否</b>	
8	自分が嫌いな子なら入れない。
11	遊びがつまらなくなりそうなら、入れない。
14	やっている遊びによって、入れるか入れないか決める。
16	人数が足りていたら入れない。
2	悪い態度で言われたら、入れない。
5	遊んでいる子とその子が仲がいいのであれば入れる。
<b>第3因子 説明をともなった拒否</b>	
6	遊びに入れない理由を相手が傷つかないように優しく説明する。
9	断るときは、相手の気持ちも考え、入れない理由を相手に分かりやすく伝える。
15	人数が多すぎるときは「ごめんね」をきちんと言い、今度誘うことを伝える。
12	一緒に遊んでいる子が嫌だといったら、相手に今度一緒に遊ぼうという。
13	まわりの子と相談してだめなときは、謝って今度にしてもらう。

(2) 調査項目：遊び種類に関しては次のように調べられた。

①遊び相手の有無・程度に関する項目

日頃、主に友達と遊ぶのか、1人で遊ぶのか、また、どのくらい友達や1人で遊ぶのかについて調べるために、「友達と遊ぶ」「どちらかといえば友達と遊ぶ」「どちらともいえない」「どちらかといえば1人で遊ぶ」「1

人で遊ぶ」の5段階で回答が求められた。

②遊び場所に関する項目

「あなたはどんな遊びをよくしていますか?」という質問に対して、自由記述による回答が求められた。その回答による遊び内容から遊び場所による分類が行われ、『室内』群、『室外』群、『室内外』群に分けられた。

③遊具・ルールの有無に関する項目

遊具の有無については、上述の予備調査により、遊びタイプⅠ・Ⅱに分類された。

**分析手続き：**遊び環境(遊び相手の有無・程度, 遊び場所, 遊具・ルールの有無) 及び性別(男・女)を独立変数とし、遊び能力の尺度の各因子を従属変数とする分散分析が実施された。分散分析の結果が有意であった場合、下位検定として、LSD法による多重比較を行った。ただし、遊具・ルールの有無による分類である、遊びタイプⅡに関しては各群の男女において人数の偏りが見られたことから、性による差は検討できず、t検定を行なった。

**結果及び考察**

**(1) 遊び相手の有無・程度による遊び能力の差**

1人遊びの程度や仲間遊びの程度により、遊び能力にどのような差を示すかを検討するため、次のような群分けを行なった。すなわち、先述の調査項目(2)①の回答から、「どちらかといえば1人で遊ぶ」「1人で遊ぶ」は群内のケースが少なかったため、この2つの群を合わせて、1つの群とした。よって、友達と遊ぶは第1群、どちらかといえば友達と遊ぶは第2群、どちらともいえないは第3群、どちらかといえば1人で遊ぶまたは1人で遊ぶは第4群と称する。

① 遊び相手の有無・程度による基本的遊び能力の差  
基本的遊び能力と遊び相手の有無・程度との関連についてみる (Table2-1参照)。まず、第1因子「気遣い・公平」について、遊び相手の有無・程度群及び性において主効果が見られ(順に、 $F(3,670)=15.95, p<.001$ ;  $F(1,670)=25.54, p<.001$ )、第1群が最も高く (Mse=26.40,  $p<.05$ )、女子のほうが男子よりも、得点が高いことが示された。この「気遣い・公平」因子は、遊ぶ相手、つまり、友達に対して思いやりを持って接し、決まりやルールをきちんと守って円滑に遊ぶといった行動や態度を表している。友達とより多く遊ぶ場合、このような行動は自然にできるようになるのではないかと推察される。また、女子は社会的に望ましくあろうとすることから、人との関係を保とうとする特徴がある(姜・大重, 2005)という先行研究の指摘を考慮すると、遊びの場面においても男子より女子は、対人関係を保持する傾向がより強く、それにより友達への思いやりや配慮の気持ち及びその姿勢がより多く表れやすいのではないかと推察される。

次に、第2因子「創造性」及び第3因子「自己表出」のいずれにおいても、遊び相手の有無・程度群においてのみ主効果がそれぞれ見られ(順に、 $F(3,670)$

Table 2-1 遊び相手の有無・程度及び性別による基本的遊び能力尺度の各因子項目の得点の平均とSD及び分散分析の結果

	遊び相手の有無・程度	性別	M(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
第1因子 気遣い・公平	第1群 <sup>1)</sup>	男	31.96(5.55)	241	$F(3,670)=15.95***$	n. s.	第1群>第3群, 第2群, 第4群 女>男
		女	33.37(4.86)	246			
	第2群 <sup>2)</sup>	男	27.94(5.41)	63			
		女	31.45(4.57)	65			
	第3群 <sup>3)</sup>	男	27.90(5.86)	31			
		女	31.11(4.43)	19			
	第4群 <sup>4)</sup>	男	29.80(6.48)	15			
		女	30.77(5.20)	13			
第2因子 創造性	第1群	男	17.86(4.52)	246	$F(3,670)=13.03**$	n. s.	第1群>第4群, 第2群, 第3群; 第2群>第3群
		女	17.02(4.25)	247			
	第2群	男	15.58(4.97)	66			
		女	16.08(3.87)	64			
	第3群	男	13.93(4.59)	30			
		女	15.00(5.19)	19			
	第4群	男	13.50(4.91)	14			
		女	15.38(5.78)	13			
第3因子 自己表出	第1群	男	15.02(3.68)	2	$F(3,670)=16.57***$	n. s.	第1群>第2群, 第3群, 第4群; 第2群>第4群
		女	14.96(3.11)	246			
	第2群	男	13.43(4.05)	65			
		女	13.61(2.88)	66			
	第3群	男	13.03(3.84)	31			
		女	12.84(3.39)	19			
	第4群	男	11.33(4.39)	15			
		女	12.38(4.21)	13			

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

注)第1群<sup>1)</sup>: 友達と遊ぶ, 第2群<sup>2)</sup>: どちらかといえば友達と遊ぶ, 第3群<sup>3)</sup>: どちらともいえない, 第4群<sup>4)</sup>: どちらかといえば1人で遊ぶ・1人で遊ぶ

=13.03,  $p < .001$  ;  $F(3, 670) = 16.57, p < .001$ ), 第2因子「創造性」の場合下位検定の結果, 第1群のほうが第4群, 第2群, 第3群よりも得点が高く, 第2群のほうが第3群より高かった ( $Mse = 20.07, p < .05$ )。第3因子「自己表出」においては, 下位検定の結果, 第1群が最も得点が高く, 第2群のほうが第3群より高いことが示された ( $Mse = 12.09, p < .05$ )。「創造性」, 「自己表出」因子はそれぞれ遊びについてアイデアを出したり, 遊びを盛り上げたりするために友達を楽しくさせたり(「創造性」), 遊びに関する意見や態度を示したりする(「自己表出」)内容である。このようなことは, 友達と遊ぶほどより多く示されたが, これについて, 子どもは友達との遊びが多いことにより, 自分だけでなく, 周りの友達も楽しく遊べるように自ら新しい案を出そうとしたり, 遊び方を工夫したりするなど, 相手に自分の考えを伝える機会が多くなり, それにより, 積極的に遊びに関わっていきやすいのではないかと推察され, 本研究の結果はこのことによるものと解釈される。

② 遊び相手の有無・程度による対人交渉能力の差  
対人交渉能力と遊び相手の有無・程度との関連に

ついてみると (Table2-2参照), 第1因子「思いやり受諾」, 第3因子「説明をともなった拒否」のいずれにおいても, 遊び相手の有無・程度群の主効果 (順に,  $(3, 678) = 4.92, p < .01$  ;  $F(3, 678) = 3.20, p < .05$ ) 及び性の主効果 (順に,  $F(1, 678) = 11.05, p < .01$  ;  $F(1, 678) = 31.36, p < .001$ ) がそれぞれ見られ, いずれにおいても第1群のほうが第2群, 第3群よりも得点が高く (順に  $Mse = 14.35, p < .05$  ;  $Mse = 14.67, p < .05$ ), 女子のほうが男子よりも, 得点が高いことが明らかとなった。友達と多く遊ぶほど, 友達との接し方を自分なりに理解する経験が多くなることが予想され, どうすれば友達と仲良く遊べるか, 遊びを楽しむことができるかを自然と考えるようになり, 友達だけでなく他者への思いやりや気配りが育っていくのではないかと推察される。

また, 第2因子「条件付受諾・拒否」については, 性においてのみ主効果が見られ ( $F(1, 678) = 7.11, p < .01$ ), 女子の方が男子よりも得点が高いことが示された。このように, 対人交渉能力尺度の3つの因子全てにおいて男子より女子のほうが高い得点が示された。これについては, 女子は遊びを“友達と仲良くなれるもの”と言う人

Table2-2 遊び相手の有無・程度及び性別による対人交渉能力尺度の各因子項目の得点の平均とSD及び分散分析の結果

	遊び相手の有無・程度	性別	M(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定			
第1因子 思いやり受諾	第1群 <sup>1)</sup>	男	19.05(3.90)	243	$F(3, 678) = 4.92^{**}$	n. s.	第1群>第3群, 第2群 女>男			
		女	19.62(3.64)	245						
	第2群 <sup>2)</sup>	男	17.21(4.25)	66	$F(1, 678) = 11.05^{**}$	n. s.	女>男			
		女	18.87(3.40)	67						
	第3群 <sup>3)</sup>	男	17.23(3.13)	31						
		女	19.65(3.77)	20						
	第4群 <sup>4)</sup>	男	18.27(3.83)	15						
		女	19.00(3.70)	13						
第2因子 条件付 受諾・拒否	第1群	男	16.85(5.08)	241				$F(1, 678) = 7.11^{**}$	n. s.	女>男
		女	17.48(4.40)	244						
	第2群	男	16.66(4.04)	67	$F(3, 678) = 3.20^*$	n. s.	第1群>第2群, 第3群 女>男			
		女	18.28(4.16)	67						
	第3群	男	16.40(4.47)	30						
		女	19.05(4.16)	19						
	第4群	男	16.25(3.75)	16						
		女	16.46(3.48)	13						
第3因子 説明を ともなった 拒否	第1群	男	17.72(4.03)	243				$F(3, 678) = 31.36^{***}$	n. s.	第1群>第2群, 第3群 女>男
		女	19.26(3.46)	247						
	第2群	男	16.57(4.38)	67	$F(1, 678) = 11.05^{**}$	n. s.	第1群>第2群, 第3群 女>男			
		女	18.47(3.32)	66						
	第3群	男	16.56(3.37)	32						
		女	17.65(3.34)	20						
	第4群	男	17.44(3.56)	16						
		女	18.92(4.15)	13						

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

注) 第1群<sup>1)</sup>: 友達と遊ぶ, 第2群<sup>2)</sup>: どちらかといえば友達と遊ぶ, 第3群<sup>3)</sup>: どちらともいえない, 第4群<sup>4)</sup>: どちらかといえば1人で遊ぶ・1人で遊ぶ

間関係作りのひとつとして捉えており、対人的な意味が大きい、男子は“遊びは自己の熱中の対象や暇つぶし”と言う自分を中心とした意味合いが大きい(今野, 2006)という先行研究の結果を支持するものと考えられる。つまり、女子は男子よりも人間関係をより大切にすると考えられることから、「説明をともなった拒否」因子のように、相手の仲間入りを拒否する場合もきちんと言葉で伝え、相手を傷つけず、フォローできるのではないかと予想される。また、「思いやり受諾」及び「条件付受諾・拒否」因子は、仲間に入れるか、否かについてどのように考えているかを問われるだけでなく、どのように言葉や行動で示すかをも問われる内容のものである。すなわち、女子は男子よりも仲間に入れるか、入れないかをより自主的に判断し、その判断により、仲間を入れるか否かを決めていることがうかがえる。このことから、対人交渉場面において、女子は男子より、自分なりのより明確な判断基準を持って行動しているものと解釈される。

(2) 遊び場所による遊び能力の差

遊び能力が遊び場所及び性にどのように関連しているかをより具体的に調べるために、遊び場所に関しては主にどこで遊ぶのかによって、次のような群分けを行ない、検討を行なった。室内で遊ぶ場合を『室内』群、室外で遊ぶ場合を『室外』群、室内及び室外で遊ぶ場合を『室内外』群の3群に分けた。

① 遊び場所による基本的遊び能力の差

基本的遊び能力と遊び場所との関連をみると (Table3-1 参照)、まず、第1因子「気遣い・公平」については、遊

び場所の群においてのみ主効果が見られ (F (2,668) =2.69,p<.10), 『室内外』群のほうが『室内』群, 『室外』群よりも得点が高いことが示された (Mse=27.21, p<.05)。これについては、室内外に偏らず、様々な場所で遊ぶことは、人とかかわりや物の扱いなどにおいて多くの経験が得られることができ、それにより、相手への気遣いや公平な態度・行動が身につくようになるからではないだろうか。

次に、第2因子「創造性」、第3因子「自己表出」についてみると、それぞれ遊び場所群の主効果が見られ(順に、F (2,668) =9.11,p<.001; F (2,668) =8.38,p<.001), いずれにおいても『室外』群, 『室内外』群より『室内』群が低いことが示された (順にMse=20.60, p<.05; Mse=12.42, p<.05)。これは、室内だけに偏って遊ぶことの弊害を示しているものと解釈される。すなわち、「室内」は、遊び場所の範囲が限られるため、遊びの内容も制限され、意見や考えを出すことも少なくなると思われる。その点、「室外」は遊ぶ範囲も広く、友達との関わりも多くなることが考えられ、子どもの考えや意見で自由に遊びを決めることができ、友達と一緒に楽しもうとする意欲がわいてくるのではないかと推察される。室内遊びは、室外遊びほど動き回れる空間でないため、行動範囲は決まってしまう、友達と遊びを楽しむために自由な発想で工夫できる機会が少ないと考えられ、創造性が養われにくいのではないだろうか。また、「自己表出」も室内遊びだけでは身につけにくいと推察される。室内遊びは、ある一定の空間で遊ぶため、様々な物や多くの人との関わりがもちにくく、自分の思いを相手に伝える

Table3-1 遊び場所及び性別による基本的遊び能力尺度の各因子項目得点の平均とSD及び分散分析の結果

	遊び場所	性別	M(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
第1因子 気遣い・ 公平	室内群	男	29.62(5.75)	68	F(2,668)=2.69†	n. s.	室内外群>室内群, 室外群
		女	32.52(5.25)	83			
	室外群	男	29.54(7.02)	24			
		女	36.14(4.10)	7			
第2因子 創造性	室内外群	男	31.50(5.07)	252	F(2,668)=9.11***	n. s.	室外群, 室内外群>室内群
		女	32.83(4.75)	253			
	室内群	男	14.97(4.83)	69			
		女	16.02(4.08)	82			
第3因子 自己表出	室外群	男	17.16(5.15)	25	F(2,668)=8.38***	n. s.	室外群, 室内外群>室内群
		女	20.00(2.16)	7			
	室内外群	男	17.60(4.69)	253			
		女	16.84(4.38)	253			
第3因子 自己表出	室内群	男	12.84(3.67)	70	F(2,668)=8.38***	n. s.	室外群, 室内外群>室内群
		女	14.13(3.25)	83			
	室外群	男	14.88(3.88)	24			
		女	15.86(2.27)	7			
室内外群	男	14.98(3.79)	257				
	女	14.62(3.24)	254				

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05, †p<.10

Table3-2 遊び場所及び性別による対人交渉能力尺度の各因子項目得点の平均とSD及び分散分析の結果

	遊び場所	性別	M(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
第1因子 思いやり受諾	室内群	男	18.12(4.36)	67	F(1, 671)=9.58**	n. s.	女>男
		女	19.47(3.97)	83			
	室外群	男	17.36(4.27)	25			
		女	20.86(2.41)	7			
	室内外群	男	18.86(3.82)	256			
		女	19.45(3.51)	255			
第2因子 条件付 受諾・拒否	室内群	男	16.49(4.32)	69	F(1, 671)=7.61**	n. s.	女>男
		女	18.00(4.50)	82			
	室外群	男	16.54(5.07)	24			
		女	17.86(5.52)	7			
	室内外群	男	16.86(4.95)	253			
		女	17.68(4.30)	254			
第3因子 説明を ともなった 拒否	室内群	男	16.75(3.75)	69	n. s.	F(2, 671)=5.06**	女: 室外群>室内外群
		女	19.27(3.77)	83			
	室外群	男	16.36(4.69)	25			
		女	22.00(2.76)	6			
	室内外群	男	17.73(4.06)	255			
		女	18.84(3.36)	257			

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05, † p<.10

場面が少ない環境になりやすいと考えられる。このことから、室内遊びに偏った場合、遊びについてアイデアを出したり、遊ぶときの自分の気持ちを言葉であらわすという点については、機会そのものが少なくなることが考えられ、遊び能力への負の影響が予想される。

## ② 遊び場所による対人交渉能力の差

対人交渉能力と遊び場所との関連についてみると(Table3-2参照)、第1因子「思いやり受諾」、第2因子「条件付受諾・拒否」については、いずれにおいても性の主効果のみ見られ(順に、 $F(1, 671) = 9.58, p < .01$ ;  $F(1, 671) = 7.61, p < .01$ )、女子のほうが男子よりも得点が高いことが示された。これは、前述の(1)②の対人交渉能力と遊び相手の有無・程度における結果と同様のものではあった。このことから、女子は男子より人とのかわりや状況判断についての自分自身の基準をよりしっかり持っていると考えられ、対人交渉場面において、そのことが示されたものと推察される。

第3因子「説明をともなった拒否」においては、遊び場所と性の交互作用が見られ( $F(2, 671) = 5.06, p < .01$ )、下位検定の結果、性における群の単純主効果のみ有意となり、女子において『室外』群のほうが『室内外』群より得点が高かったが( $Mse = 11.95, p < .05$ )、男子においては有意な結果は得られなかった。上述のように、遊び相手の有無・程度では、基本的遊び能力の第1因子「気遣い・公平」及び対人交渉能力の3因子全てに、また、遊び場所においては対人交渉能力の第1因子「思いやり受諾」、第2因子「条件付受諾・拒否」において、男子より女子の方が得点が高いという結果がそれぞ

れ見られた。このように、室外遊びのほうが多くの人や物と接する機会が多く、それにより、人間関係や物事についての知識や経験を広く得られることを考えると、何かトラブルが起こっても、相手の気持ちや状況を考慮に入れ、臨機応変に対応できる力が身につくのではないだろうか。本研究では、女子においてのみこれを支持するような結果が示されたが、これについては、今後さらなる検討が望まれる。

## (3) 遊具・ルールの有無による遊び能力の差

遊具・ルールの有無により、遊びタイプをI、IIに分類し、それによる遊び能力の差の検討を行なった。ただし、遊びタイプIにおいては、「1人遊び」群のケースが少なかったため、「1人遊び」群を除いた4つの群が検討の対象となった。

### ① 遊具・ルールの有無による基本的遊び能力の差

遊具・ルールの有無による基本的遊び能力の差について、遊びタイプIでは、有意な結果が得られなかったが、遊びタイプIIについて、第3因子「自己表出」においてのみ有意差が見られ( $t(322) = -2.21, p < .05$ , 両側検定)、『仲間・遊具遊び』群のほうが『仲間遊び』群よりも得点が高かった(Table 4参照)。『仲間・遊具遊び』は仲間との遊びに遊具を取り入れた、より構造的性の高い遊びであり、本研究での遊び種類の中で最も構造的性の高い遊びである。そのような遊びの場合、遊びの目的や内容が明確となることが考えられ、子どもは遊びについて実感を持ってイメージでき、遊びについての自分の意見を具体的に示しやすくなることが推察されるが、本研究はこのことによるものではないだろうか。



子どもにおける遊び種類による遊び能力の差についての検討

Table4 遊びタイプIIによる遊び能力尺度の各因子項目得点の平均とSD及びt検定の結果

	遊びタイプII	M(SD)	N	下位検定	
基本的遊び能力	第1因子	仲間遊び群	31.69(4.68)	58	n. s.
	気遣い・公平	仲間・遊具遊び群	31.35(5.59)	259	
	第2因子	仲間遊び群	15.47(4.29)	59	n. s.
	創造性	仲間・遊具遊び群	16.74(4.79)	262	
	第3因子	仲間遊び群	13.24(3.35)	59	t(322)=-2.21* 仲間・遊具遊び群>仲間遊び群
		自己表出	仲間・遊具遊び群	14.41(3.74)	
対人交渉能力	第1因子	仲間遊び群	19.59(3.15)	59	n. s.
	思いやり受諾	仲間・遊具遊び群	18.81(4.11)	264	
	第2因子	仲間遊び群	17.24(4.36)	59	n. s.
	条件付受諾・拒否	仲間・遊具遊び群	17.81(4.50)	262	
	第3因子	仲間遊び群	18.46(2.91)	60	t(115.28)=2.06* 仲間遊び群>仲間・遊具遊び群
		説明をともなった拒否	仲間・遊具遊び群	17.54(4.00)	

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05, †p<.10

Table5 遊びタイプI及び性別による対人交渉能力尺度の各因子項目の得点の平均とSD及び分散分析の結果

	遊びタイプI	性別	M(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
第1因子 思いやり受諾	仲間遊び群	男	18.00(4.58)	3	n. s.	n. s.	
		女	20.08(3.20)	12			
	仲間・遊具遊び群	男	18.33(1.15)	3			
		女	19.91(4.70)	23			
	仲間・ルール遊び群	男	17.73(2.10)	11			
		女	20.18(3.14)	33			
仲間・ルール・遊具遊び群	男	18.45(4.13)	184				
	女	19.57(3.75)	54				
第2因子 条件付受諾・拒否	仲間遊び群	男	14.33(2.53)	3	n. s.	n. s.	
		女	18.75(3.91)	12			
	仲間・遊具遊び群	男	14.67(4.16)	3			
		女	18.26(3.96)	23			
	仲間・ルール遊び群	男	17.00(5.16)	11			
		女	17.03(4.33)	33			
仲間・ルール・遊具遊び群	男	17.31(4.60)	182				
	女	19.50(3.96)	54				
第3因子 説明をともなった拒否	仲間遊び群	男	14.67(0.58)	3	F(3,313)=3.18*	n. s.	仲間・遊具遊び群, 仲間・ルール遊び群>仲間・ルール・遊具遊び群
		女	18.92(3.09)	12			
	仲間・遊具遊び群	男	16.67(3.51)	3			
		女	19.70(3.56)	23			
	仲間・ルール遊び群	男	17.91(3.15)	11			
		女	18.82(2.71)	34			
仲間・ルール・遊具遊び群	男	17.17(4.11)	185				
	女	17.93(3.55)	55				

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

② 遊具・ルールの有無による対人交渉能力の差

遊具・ルールの有無による対人交渉能力の差についてみると、遊びタイプI・IIのいずれにおいても(Table4,5参照)、第3因子「説明をともなった拒否」についてのみ、遊びタイプ群の主効果が見られた。下位検定の結果、遊びタイプI (F(3,313)=3.18, p<.05, p<.05, 両側検定)

においては、「仲間・遊具遊び」群、「仲間・ルール遊び」群のほうが「仲間・ルール・遊具遊び」群よりも得点が高いことが示された(Mse=14.39, p<.05)。遊びタイプII (t(115.28)=2.06) については、『仲間遊び』群のほうが『仲間・遊具遊び』群よりも得点が高かった。つまり、遊びタイプI, IIのいずれにおいてもルールや遊

具が加えられた遊びであるほど「説明をともなった拒否」の得点が低いことが示された。このことについては、次のようなことが考えられる。

遊びに遊具やルールが加わってくるほど、使う遊具やルールにより、遊び方や内容が決まってしまう場合が多く、遊びの対象物の構造的性が高くなるといえる。つまり、遊びの構造的性が高い場合、それによって、直接相手と意見を交わすことが少なくても遊びが成立することが予想される。したがって、「仲間・遊具遊び」や「仲間・ルール遊び」は、遊具またはルールだけしか決まっておらず、遊びの対象物の構造的性がより低いといえる。そのような遊びの場合、遊び活動において、制約が少なくなり、相手と意見や気持ちを話し合うことにより、決めることが多くなると考えられる。また、決まりごとの少ないより単純な遊びの場合、何か予想しない場面も生じやすいことが推察され、その場合、相手の気持ちを考え、きちんと理由を説明したり、謝ったりと相手への配慮を心がけ、対応する機会が多くなるのではないだろうか。本研究の結果はこのことによるものと解釈される。

遊びにルールや遊具を取り入れた場合による遊び能力の差についてのこれらの結果から、構造的性のより低い遊び（例えば遊びタイプⅡにおいての『仲間遊び』など）が多い場合、「説明をともなった拒否」のような対人交渉能力に、一方、構造的性のより高い、ルールや遊具を介した遊び（例えば遊びタイプⅡにおいての『仲間・遊具遊び』）は、遊びの中で自分の意見や態度を示すこと（「自己表出」）にそれぞれ強い関連があることが推察される。

### 全体的考察

本研究では、遊び能力が育まれる遊び環境要因という観点から、遊び相手の有無・程度や遊び場所及び遊具・ルールの有無により遊びを分類し、それらと遊び能力との関連を調べた。ここでは、主な結果について考察していくことにする。

まず、遊び相手の有無・程度による遊び能力の差については、友達とよく遊ぶ場合、基本的遊び能力がより高いことが示された。友達と遊ぶことによって、人間関係について多く学ぶことができ、友達と楽しく遊ぶためにどうしたらよいのか考えたり、相手を思いやりたりする行動が身につくやすくと推察される。それに対して、対人交渉能力においては、友達と遊ぶ程度による3つの群との間には有意差は示されたが、この3つの群と1人でよく遊ぶという第4群との間に有意差が示されなかった。これに関しては、本研究において、基本的遊び能力は、実際遊び場面で子どもがどういうふうに行っているかが問われる項目であるが、対人交渉能力においては、仮想場面による回答が求められ、このような場合、友達と遊ぶ経験が多いほど実際の経験に基づいた回答になりやすいが、1人遊びが多い子どもは仲間入り場面を経験することが少なく、自分の想像や理想が含まれた回答になりやすかったのではないかと推察される。すなわち、友

達と遊ぶ程度による3つの群と1人遊びが多い群との間に対人交渉能力尺度得点において有意差が示されなかったのはこのことによるものと解釈される。

一方、友達と遊ぶ程度による群間では、第1因子「思いやり受諾」、第3因子「説明をともなった拒否」において第1群のほうが第2群、第3群よりも得点が高いことが示された。これは、第4群とは異なり、第2、3群が友達と遊ぶ経験が多くあるため、自分の理想や想像よりも自分が実際行っていることが回答に大きく反映されているのではないかと考えられる。友達と遊ぶことが多い場合は、友達と密接に関わる機会がより多くあることから、相手とのコミュニケーションも増えると考えられ、対人交渉場面においても適切に対応しやすくなるのではないかと予想される。

次に、遊び場所及び遊具・ルールの有無による遊び能力の差についてみると、基本的遊び能力「創造性」、「自己表出」の得点は、『室内』群において最も低く、また、「自己表出」は遊びタイプⅡにおいて、『仲間・遊具遊び』群が『仲間遊び』群よりも高い得点を示している結果が得られた。

本研究での「創造性」、「自己表出」因子は、先述のように遊びそのものについて案を出したり、具体的な意見や態度を示す内容であることを考えると、室内遊びは、遊び場所が限られた空間であることから、様々なものや多くの人との関わりが比較的少ないことが考えられ、それにより、自分のアイディアや意見を示すという経験が少なくなりやすいのではないだろうか。また、この「自己表出」は、構造的性の高い遊びにより多く見られたが、ルールや遊具などを取り入れた場合、遊びのテーマが明確になり、子どもは遊びについての具体的なイメージが浮かびやすいため、遊びそのものについて自分の意見や考えを相手に伝えられる環境になりやすいと思われる。本研究の結果はこれによるものと考えられる。

最後に、対人交渉能力の差については、遊びタイプⅠにおいて、「仲間・遊具遊び」群、「仲間・ルール遊び」群のほうが「仲間・ルール・遊具遊び」群よりも、遊びタイプⅡにおいては、『仲間遊び』群のほうが『仲間・遊具遊び』群よりも「説明をともなった拒否」の得点が高かった。このことから、構造的性の低いより単純な遊びほど、友達と話し合ったり、相手と直接的関わりを持つ機会が多く、そのような経験により仲間入り場面のような対人葛藤が生じやすい場面において、うまく対処していくことができるのではないかと推察される。

### 今後の課題

まず、本研究では、遊び種類と遊び能力との関連について検討を行なったが、この遊び種類や遊び能力は子どもの自己概念を含めた内面の様々なことにおいても何らかの影響を及ぼすのではないだろうか。今後は、子どもの各発達

の側面に遊びがどのように関連しているかについて、さらに検討していくことが必要であると考えられる。

次に、遊び相手の有無・程度及び性による遊び能力の差においては、基本的遊び能力の第1因子「気遣い・公平」及び対人交渉能力の3因子全てに、また、遊び場所及び性による遊び能力の差については対人交渉能力の第1因子「思いやり受諾」、第2因子「条件付受諾・拒否」において、男子より女子の方が得点が高かった。つまり、遊び能力において男子より女子の方が全体的により高いことが示唆された。このような本研究において示された遊び能力についての性差に関しては部分的に先行研究を裏付けるものとして解釈されたが、男女のそれぞれどのような特性による差であるかについてより明確にすることが望まれる。

最後に、本研究においての遊び能力、特に、対人交渉能力については仮想場面を用い作成された尺度により測定されたが、今後は子どもの実際の遊び場面についての観察や面接調査などを実施することにより、子どもの実態にそった対人交渉能力を見出すことが必要であろう。それにより、子どもの遊び能力についてより明らかにできるのではないだろうか。

これらのことが、課題として残される。

## 謝辞

本研究を実施するに当たり、質問・調査実施に快くご了承くださいました小学校の先生方より、多大なるご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。また、被験者としてご協力をいただきました児童の皆様から感謝申し上げます。

## 引用文献

- 長谷川 祐子 2005 昔ながらの子どもの遊びの意義—現代の遊びと比較して— 教育学科研究年報 第31号 18  
 深谷 和子 1990 子どもの世界の遊びと流行 大日本図書  
 今野 洋子 2006 「友達」「遊び」「学習」から見た子

- どもの生活意識—北海道A市の子どもを対象とした調査より— 浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要「生涯学習研究と実践」第9号 121-134  
 石田 勢津子 1995 児童の心理学 有斐閣  
 姜 信善・大重 絵美里 2005 小学生における関係性攻撃経験が対人関係に及ぼす影響 富山大学教育実践総合センター紀要 第6巻 13-19  
 姜 信善・酒井 えりか 2006 子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連 富山大学人間発達科学部紀要 第1巻 第1号 111-119  
 姜 信善・滝川 祐子 2007 遊び能力が子どもの自立性に及ぼす影響についての研究 富山大学人間発達科学部紀要 第2巻 第1号 167-178  
 Kathy Hirsh-Pasek & Roberta Michnick Golinkoff & Diane Eyer 2006 子どもの「遊び」は魔法の授業 株式会社アスペクト  
 眞下 志穂子 2006 子どもの遊びの研究—大人の子どもへのかかわりについて— 教育学科研究年報 第32号  
 森 楸・植田 ひとみ・福井 敏雄 1982 幼児の遊び能力形成要因の多重量解析 教育社会学研究第37集 96-105  
 森 楸・植田 ひとみ・福井 敏雄・西田 忠男 1984 子どもの遊び能力と学校生活（Ⅰ）～その位置づけと役割～ 日本教育社会学会大会発表要旨抄録 第36号 104-107  
 森 楸・植田 ひとみ・福井 敏雄・西田 忠男 1985 子どもの遊び能力と学校生活（Ⅱ）～遊び能力と学力・生活態度との関連を中心に～ 日本教育社会学会大会発表要旨抄録 第37号 64-67  
 村瀬 浩二・落合 優・矢野 正樹 2005 子どもの遊びの調査から～子どもの遊びを取り巻く状況～ 横浜国立大学教育人間発達科学部紀要第1号 教育科学 7 15-32  
 祐宗 省三 1994 子どもの発達を知る心理学 北大路書房

(2009年8月31日受付)

(2009年11月6日受理)